

鈴木徹 6 度目のパラリンピックへ

2021 年8月24日、東京 2020 パラリンピック競技大会が開幕した。山梨県出身で、2004 年から小瀬スポーツ公園陸上競技場(現 JIT リサイクルインクスタジアム)を練習拠点としている日本初の義足のハイジャンパー 鈴木徹選手(SMBC 日興証券)が、6度目のパラリンピックに挑む。山梨県スポーツ協会では、現地へ入る直前、鈴木選手が歩んできた競技人生や、パラリンピックについて思うことなどの話を聞くことができた。

～ 現在の心境は ～



過去に5度もパラリンピック出場の経験があれば、我々が想像する「特別な場所(大会)」ではないのではないか?とってしまう。しかし鈴木選手は、「パラリンピックは特別な大会。4年に一度という希少性もあるし、オリンピックの直後に開催されることもあるので、やはり特別です。」と話す。

そして何より、2000 年に開催されたシドニーパラリンピックから6度目の挑戦。21 年間、トップアスリートとして活躍できる原動力は何なのか。「6回は確かに多いですが、7回目のアスリートもいます。当然、この間がすべて順調だったわけではなく、ケガもありました。でもその中でまだメダルが獲れていないことは、今の原動力になっていることは間違いありません。」2006 年ジャパンパラ陸上競技大会で、世界で2人しかいない2mジャンパーとなった鈴木選手は、飽くなき探求心を持ってパラリンピックのメダルに向かって突き進む。

～ ケガと向き合う日々、そして小さくなっていく針の穴 ～

2006 年に2mジャンパーとなった翌年、踏切脚である左足に強い痛みを感じた。診断は、「ジャンパーズニー(膝蓋腱炎)」。この日から、ケガと向き合い、そして痛みとともに歩む競技生活が始まった。今日はもう少し練習したいと思う日も、ひざに痛みが出てきた日はそこで練習を終了するなど、満足な練習ができていたわけではないが、それでも競技を続けた。2006 年以降、次に2mのバーを越えたのは2015 年、35 歳の時だというから驚きだ。我々、スポーツ協会の中にも、アスリートとしてスポーツに取り組んだスタッフはいる。しかし、大きなケガをする、または身体活動のピークを越えたであろう年齢を迎えたと感じる、パフォーマンスが上がらないなど、色々な理由はあるが、これらのことが起こるとき、または感じる時、すべてのアスリートは一律に大きな決断を迫られる瞬間を迎える。「引退」である。鈴木選手はどう感じていたのか。「私は現在 41 歳です。当然、年々針の穴は小さくなっていっているな、と感じています。しかし、どんなに小さな穴でも、小さい穴だからこそ、そこに糸を通す方法を考える。若いときはそんなこと考えなくて良かった。でも、この年齢になると、糸を通す方法を考え、試みる、それがテクニックになるんだと思います。人間はどこまでイけるのか、自分の身体が実験台です。」・・・?。鈴木選手、あなたにはまだ針の穴が、糸が通る穴が見えているのですか?何となく、感



覚的なものではあるが、その”針の穴”の感覚は分かる気がする。そして、多くのアスリートはその穴が閉じる、または穴が小さすぎて糸が通る気がしなくなる時、その時もまた、「引退」を決断する要素になることがある。しかし、鈴木選手にはまだはっきりと、明確にその穴が見えている。プロ野球選手や J リーガーなど、その他のスポーツでもベテランと呼ばれる年代になってもなお、高みを目指す選手がいる。鈴木選手もそのような選手のひとりであり、今もなお、明確に自分のパフォーマンスが上がっていく姿が、その針の穴の向こう側にはっきりと見えている。

～ ハンデを背負ったからこそ巡り合えた、スポーツとの出会い ～

鈴木選手は、中・高校生時代ハンドボールの選手として国体で3位を獲得したが、その後、自動車事故で右足の膝から下を失い、現在、走高跳の選手として輝かしい成績を残している。

しかし、鈴木選手がハンデを背負ったのは、幼少期に遡るそうだ。幼少期、身体が弱く、5歳で徐脈性不整脈と診断された。この病気により、スポーツをしてもすぐに息が上がるので、足は速かったもののマラソン大会では途中棄権しなければならないなど、スポーツ活動には制限が掛かっていた。同じころ、妹が近所の川で溺れるという出来事があった。妹が溺れていることを母親に伝えに行ったが、パニックのあまり言葉が出なかった。そこから始まった「どもり(吃音症)」というハンデ。「どもり」は、小学校ではイジメに繋がった。教室で行われる授業は苦痛で、何か発言をすれば、周りからバカにされた。そのため、イジメを回避するため鈴木選手が取った行動は「しゃべらない」という選択。それで”自分”を保っていたそうだ。そして、「しゃべらない」ことで溜まっていくエネルギーを発散する場所が、「スポーツ」だった。当時はバスケット少年だった鈴木選手は、体育の時間は周りの友達から一目置かれた。先生からはたくさん褒めてもらえた。鈴木選手は言う「スポーツには言葉はいらない。スポーツは言葉を超える力がある。」と。だから鈴木選手は、「”スポーツが好き”だからやっているのではなく、(自分が自分であるために)”スポーツをやらなければならない。”そんな状況であった。このようにして、特別な価値を持つスポーツと巡り合った鈴木選手は、未だスポーツを超える魅力あるものに出会えていないと言い、未だにスポーツを探求し続けている。

～ さあ！東京 2020 パラリンピック競技大会へ!!そして、その向こう側へ ～

東京 2020 オリンピック競技大会では、史上最多 58 個のメダルを獲得した日本選手団。東京 2020 パラリンピック競技大会でも期待が高まるが、オリンピックと同様盛り上がるのだろうか。鈴木選手は、「(障がい者との)関わり合いが確実に少ないんです。東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会が決まった後は、山梨県でもイベントがありました。そして、そういう機会があれば関わりを持つ前と持った後では絶対何かが変わるんです。」そして、こんなエピソードを紹介してくれた。リオデジャネイロパラリンピックでの出来事、オフの時間を活用して選手たちでビーチに行った。ビーチで義足丸出しにしていると地元の人たちが寄ってきて、「おまえ、(足)どうしたの？今、パラリンピックやってるけど、出るの？」と声を掛けて来たそうだ。海外では「そんなもんですよ。」と鈴木選手。この国では、どこか気を遣って、障がいのことは触れてはいけないのではないかと、傷つけてしまうのではないかと、そんな想いか、声を掛けるのを躊躇ってしまうことがある。しかし、鈴木選手は、「関わりを持つことが、お互いを理解する一歩」だとしたうえで、東京 2020 パラリンピック競技大会について、「オリンピックは、例えば、記録なんかを楽しめばよい。しかし、パラリンピックでは、選手のパフォーマンスも観てほしいけど、それより、テレビで、家族で、ひとりでも多くの障がい者の姿を見てほ

しい。そのアスリートの生き様を見てほしい。」と話した。我々は大事な、大切なメッセージ受け取った、そんな気がした。さらに、「パラリンピックに出場するアスリートは、障がいの幅がとても広い。ボッチャや車椅子ラグビーに出場するアスリートは比較的重度の方ですし、ゴールボールなどのように、目に障がいがあるだけというアスリートもいます。なので、テレビを通して色々な障がい者を観ることができるので、障がいについて理解を深める勉強の場になって欲しいと思います。」と語り、私たちがパラリンピック競技大会をどのように観戦すべきなのかを教えてもらった。同情や哀れみ、お情けという感情ではなく、障がいがあったとしても、強く、たくましく、人間の持つ、逆境のときだからこそ現れる研ぎ澄まされた感覚、運動能力、そこを目指して躍動するパラリンピアンを観て、何かを感じた時、本当の共生に向けた社会づくりの新たな一歩を踏み出せるのではないか、そんなことを感じた。



～ 結びに ～

東京 2020 オリンピックでは、多くの新採用競技があり、新たな競技を目にすることが多かった。なかでも、スケートボードでは、ライバルの技術やパフォーマンスに対し敬意を表す場面があり、スポーツライミングでは、これから登っていくルートをライバル選手と一緒に考えているような光景を目にした。これまでのオリンピックでは、あまり目にしたことのない光景だったように思う。ライバルをリスペクトし、それを表現する、表現できる、そんな競技が現れ、我々はそれを目にし感動した。間違いなく、我々の目も、心に刻まれる感動も少しずつ変化している。その状態で、改めてパラリンピックを観てみたいと思う。

鈴木選手には、東京 2020 パラリンピック競技大会出発直前で、コンディショニング等非常にナーバスな時期にも関わらず、当初 30 分程度という約束で始めたこのインタビューは、気がつけば 2 時間もの時間を割いていただいた。本当に感謝しかない。当然、本稿では書ききれないエピソードがたくさんあるが、それはまた後日、何かの機会にご紹介したいと思う。

アスリートが、特別なステージで頑張らないなんてことは絶対はない。だから、敢えて「頑張ってください。」という言葉は掛けさせていただかなかった。私たちは、鈴木徹選手のパフォーマンスを、生き様を、テレビで、家族でしっかり目に焼きつけることにしよう。